

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス  
 《所在地》  
 東京都八王子市下柚木  
 電話 0426-76-8511~2  
 《東京事務所》  
 東京都中央区日本橋本町 3の3  
 三井銀行本町支店ビル5階  
 電話 東京 (270) 4431  
 振替口座 東京 74590番

編集・発行人 飯田宗一郎  
 製作 中央公論事業出版

# セミナー・ハウス

## SEMINAR HOUSE NEWS

第26号 20円  
 昭和47年 1月25日  
 内 容

文化交流の役割…………… 1  
 簡素に祝う一開館6周年 …… 2  
 第40回大学共同セミナー …… 4  
 第41回大学共同セミナー …… 4  
 第42回大学共同セミナー …… 5  
 第4回大学教員懇談会 …… 6  
 千人会…………… 7  
 業務通信…………… 9  
 予約状況…………… 9  
 利用状況…………… 10

文化交流という言葉は、近頃簡単に用いられているが、何が本当の文化交流であるのか、はっきりわからないままに使っている場合が多いように思われる。

一体、文化とは何か。一九世紀末にドイツで文明と文化の相違が論じられ、文明は人間の作り出したすべてのものの総合であり、文化は上部構造というか、精神文化によって表わされるような思想、文学、美術などであると考えられた。しかし、日本で、たとえば原始文化という場合に、それだけでは理解できない面が残る。いつてみれば、この考え方は、エリートが文化の担い手として考えられていたときの見方であり、現在の大衆社会においては、文化はエリートだけの持ちうる武器ではなく、むしろ先にあげた文明の考え方に近い。しかし、それでは非常に漠然としてしまう。私は、文化という限り誰が作ってもよいというものでは決してなく、ある人間が一つの考え方をもち、主体的に作り出したものであり、同時に、そこには自分(たち)が作り出したという創造の自覚があって大事にしているものも、やはり文化ではないかと思う。

それに関して一つのエピソードを申しあげたい。私は、この夏、ヨーロッパの窯場や古い窯の跡を訪ねて歩き、幸い東ドイツに入ることができて、ヨーロッパで最初に磁器が作られたマイセンへ行っ

た。磁器はもとと一、二世紀に中国において優れたものが作られ、一四世紀には朝鮮一七世紀初めには日本でもできるようになってヨーロッパへ輸出された。王侯貴族が求めている日本の磁器を自分たちで作りたいというヨーロッパの工芸家たちの血のじむような努力の結果、一八世紀初めにマイセンで作られるようになったが、初期のものは、日本の柿右衛門のスタイルとほとんど変わらないくらいよく似ている。この度、私が案内された窯場では、鳥を描

く人は何十年と鳥ばかりを描き続けているだけではなく、自分のまわりに鳥籠をぶら下げ、鳥の動きを時々手を休めてじっと見つめては描いており、花を描く人は同様に花に囲まれて描いているという具合で、その時私は、マイセンは偽物ではないと思った。

その中の一人が、今でもなおお右衛門模様を描いていたので、私が何気なく大変うまいイミテーションヨンダという、それまで大変厚くにわかれわれは日本のデザインを

描いたが、それを一つの基礎にしてこの模様をドイツ的に作り出したのであって、絶対にイミテーションではない、ということを強硬にいい出した。彼らは日本にない構図を作り出したことを彼らの創造と考えており、文化交流、あるいは文化の本物はそこまでいかなければならないのではないか、人(外国)のものをとり入れても、自分のものにしたときに初めて、その人(国)の文化が成立するのではないか、ということを強く感じたわけである。

### 文化交流の役割



青山学院大学教授  
 三上 次 男

そこで文化交流とは一体何か、という疑問があらためて私に沸き上ってきた。とくに私は古い歴史であるとか考古学を研究している立場から、原始社会における文化交流というようにどうしても歴史的な概念でとらえがちである。

たとえば、紀元前二世紀に、張騫がはじめて公式の使節として東アジアから中央アジアへ行つたがその時彼が持ち帰ったものは、ブドウとウマゴヤシ(牧草)であつたといわれている。もしも、それが事実とすれば、なぜそれを持ち

帰ったかを問題にしなければならぬ。当時、漢が北アジアの匈奴の侵入を防ぐことができなかった最大の理由は、匈奴の騎馬戦術に欲しかった。漢としてはどうしても馬を養うことのできる牧草が必要だ、という切実な要求がここに含まれているのであり、単に西のものが東へ行つたという事実だけでは、文化交流を現代の問題としてとらえる、つまり現代の世界の形成に役立つという異質の文化のとり入れ方をいう場合が多いということである。現在のわれわれ日本人の生活は、異質のもの存在を無視してはほとんど考えられないようになっていっている。美術にしてもヨーロッパで新しい流派がおこると数年のうちに日本でもたちまち出てくるというように外国のものを撰取するスピードがきわめて早い。

では一体、われわれの考え方や行動様式がヨーロッパ的になっているかといえ、非常に長い歴史のうち蓄えられた日本的なものがあるに壊されておらず、潮のごとく押し寄せられる外国の文化にほんろうされているようでありながら、意識的かどうかは別として、どこかで選択を行なっている。やはり長い歴史の伝統は無視できず、ヨーロッパ共同体のような地

さらにもう一つの大きな問題は、文化交流を現代の問題としてとらえる、つまり現代の世界の形成に役立つという異質の文化のとり入れ方をいう場合が多いということである。現在のわれわれ日本人の生活は、異質のもの存在を無視してはほとんど考えられないようになっていっている。美術にしてもヨーロッパで新しい流派がおこると数年のうちに日本でもたちまち出てくるというように外国のものを撰取するスピードがきわめて早い。

# 簡素に祝う——開館六周年

## 大浜、森戸両先生を主賓として

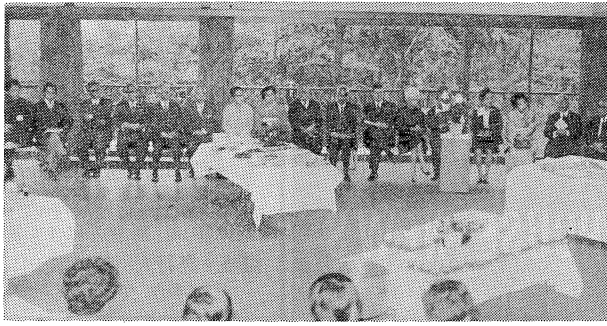
### 文化交流共同セミナーの

### 最終日行事らしく

昭和46年11月7日

大学改革が要望されている世論の中で、当セミナー・ハウスは原点を離れることなく小さな歴史をつくりつつ、ここに六年の歩みを記念するまでに至った。

六周年を余り大きく祝う慣習もないのであるが、セミナー・ハウスには貴重な教育的素材がある。



ここには人生の未来を開かねばならない若い学生が集っている。感謝すべき人にどのような感謝の方法があるかを考えることはよいことである。人の榮譽を共によるこぶといふことは、人を思う心情を養うことにもなる。

同じ時に文化交流を主題とする共同セミナーが開催されている。セミナーのプログラムの中で文化功労者を招き、六周年行事を祝い、また創立以来の御苦労をされた大先輩の長寿を六周年行事の中で喜ぶといふことは、いかにも出会の丘にふさわしい祝典形式であらう。お祝いパーティーの後半には、アジア財団の日本代表スチュアート氏が文化交流実践者として卓話をされ、パーティーを知的交流の場としたのである。うるわしい風景である。

式典方式パーティーは、創立以来共同セミナーの運営に参画されてきた早大教授川原栄峰氏の司会のもとに進行し、教授、学生、卒業生、来賓がそれぞれの主役を演じつつ、大浜信泉先生の八〇歳の

長寿を祝い、森戸辰男先生の文化功労者としての榮譽に敬祝を表明した。

### ■プログラム

開 会 一二時三〇分

挨拶と式辞 飯田宗一郎

主賓紹介—花束贈呈

大浜信泉先生と同夫人

森戸辰男先生と同夫人

大学セミナー・ハウス讃歌

共同セミナー学生有志合唱団

パーティー(開宴)

乾 杯

早稲田大学総長 村井資長氏

祝 辞

大浜信泉氏のために

明治大学総長 春日井 薫氏

森戸辰男氏のために

東京教育大学長 宮島龍興氏

謝 辞(感話)

大浜 信泉氏

森戸 辰男氏

私にとつての六周年祝

東大助教授 芳賀 徹氏

一橋大助教授 深沢 宏氏

学生(東工大三年)新井 健氏

卒業生(津田塾大)藤井頌子氏

感謝の花束贈呈

(緑の深い方々のために)

佐原 六郎、山内 恭彦

小井 廉二、大原 恭子

村出 資長、松崎 義徳

川原 栄峰、飯田宗一郎

祝電の発表

合唱「よろこびのうた」

(1頁より)

球の一体化の動きもあるが、それだからといって今、簡単に世界が何もかも一つになるかという問題である。ここに文化交流の役割と同時に限界をどのように考えていくか、という大きな問題がある。いずれにしても、現代はこの国でも自国のものだけではことが足りず、相互に他の国から滋養をとりつつ成長している。

その状況は決して世界共通ではなく、インドもイギリスも日本も、それぞれ異なっている。ただ日本の状況について付け加えるなら、たとえばヒッピー的な服装の流行も単なる風俗にしかすぎないし、借りものであっても自分のものであるかのごとく自由に、というよう放埒にものをいう。表現の自由という点では日本は非常に良いと思うが、その反対に、それでは一体、本当の日本のものは何であろうか、ということになると、たとえばタイは小乗仏教の国であり、インドは善悪の規準をヒンズー教においている社会であるのに比して、そこにはわれわれ日本人の規範というか生きる基礎となっていないものがない。その意味では日本はむしろ世界でもまれなくらい特殊なところであるといえよう。

私は、国や民族に一つの核があり、その上に東西の文化交流の結果から出ている時代の広がりというものが、と考える。たとえば紀元前三、〇〇〇年〜二、〇〇〇

年にわたる世界の中心は、エジプト、メソポタミア、インダスの三つの文明であり、これらの地域は決して離れ離れに存在していたわけではなく、緊密な経済的接觸のもとに成立していた。インダス文明の及んだ範囲は非常に広く、中心となったハラッパ、モヘンジョダロの二つの町は、六〇〇キロも離れていながら、そこから出てくるものは非常に似ており、町の形態も同じであった。どちらも焼いたレンガを使い(今でもインドやパキスタンでは太陽で乾かした泥を壁にしている家が多い)、しかも町全体に排水のための下水道が設けられている、という非常に高度な都市を造っていた。エジプトやメソポタミアと異なって、出てくるものには武器がきわめて少なく、天秤やおもりとハラッパ文化がおよんだところではかわれなかつた独特の印章(Seal)が多く、単に農業を基礎に成立していた文明、文化ではなく、商業活動が行なわれていたことを示している。その印章がメソポタミアからかなり発見されており、インドの商人が扱っていた宝石がメソポタミアからエジプトまで運ばれていた。ところが、これほど高いレベルで繁栄していた文明が、紀元前一、五〇〇年頃、何年かの間に急速に消滅し、かわってアリア人の世界が出現する。

その原因についてはさまざまな議論があるが、私がまず指摘し、

卓話 文化交流について  
 アジア財団日本代表  
 J・L・シュチュアート氏  
 閉会 一五時

\* 多摩丘陵は雑木の紅葉にはえて  
 いる。久々に訪れて下さったお客  
 さまもある。当日ゼミに来ていた  
 慶応大学の深海ゼミ、電通大の大  
 須賀ゼミなども出席して、約二〇  
 〇名の会衆で講堂は、ほどよくに  
 ぎやかである。

飯田専務理事は、一九六二年一  
 月二〇日に、この席におられる大  
 浜先生(当時早大総長)と佐原六郎  
 先生(当時慶大教授)、それと茅誠  
 司先生(当時東大総長)を加えた  
 四人で現在の敷地を視察してきた



上写真には…大浜、森戸両先生ご夫妻

時を回想しながら、自然と人間と  
 学問が調和する丘の建設に協力し  
 て下さった多くの後援者に感謝を  
 捧げ、文化交流共同セミナーで三  
 上次男教授が講義の中で大きなも  
 のには良いものがない、創造的な  
 ものは小さくとも価値があるとい  
 われたことを引用しながら、ゼミ  
 ナー・ハウスこそいつの時代でも  
 創造的なプログラムが展開される  
 生きた丘でありたいと抱負を述べ  
 た。

ついでこの機会に八〇歳になら  
 れた大浜理事長が同時に金婚を迎  
 えられたので、二重の慶祝を行な  
 いたいこと、そして、今回日本の  
 教育に貢献されたことにより文化  
 功勞者として顕彰された森戸辰男  
 氏は、セミナー・ハウス創立以前  
 からの後援者であり、その後は顧  
 問として評議員として、背後の有  
 力な支持者であるために、文化功  
 勞者として選ばれた榮譽を祝いた  
 いことについて紹介があった。

なお司会者は大浜先生の功績を  
 記憶するため、本日の記念品とし  
 て「大浜岬」に記念石を立てること  
 とを発表された。大浜岬とは、敷  
 地の南端に突き出ている一本松の  
 はえている台地の一部である。あ  
 たかも海岸の岬のごとき風景のあ  
 る場所であり、岬の眼下にはテニ  
 スコートが広がっている。

大きな拍手の中で大浜先生ご夫  
 妻がバースデーケーキとウェディ  
 ングケーキにナイフを入られられ  
 た。ご老夫婦の顔がにこやかであ



卓話中のシュチュアート氏

乾杯について、にぎやかな立食  
 パーティーに入り、これからがし  
 ばらく、おしゃべりとご馳走にせ  
 わしくなる。やがて両先生に対す  
 るお祝いの言葉が述べられ、両先  
 生のお礼の言葉が述べられた。大  
 浜先生は、ユーモアもたっぷりな  
 結婚に至った利害結婚方式という  
 恋愛でもなく見合いでもない第三  
 の方式を紹介され、森戸先生は教  
 育が文化功勞として認められた最  
 初の受賞者の意義と東大時代の学  
 者生活の思想歴について感慨深く  
 述べられた。

教授、学生からは当セミナー・  
 ハウスがいつまでも大学の先生や  
 学生たちにとってゼミナールの拠  
 点であってほしいという願望が述  
 べられ、この三月に卒業された森  
 川和久君と助、佐久間、三上、三  
 根、矢部、吉田の男女卒業生七名  
 から、卒業記念としてモーツァル  
 ト、シューベルト、ベートーベン、  
 ハイドン、パッハなどの名曲集レ  
 コード三枚が飯田専務理事の手に  
 渡された。また学生の新井君はこ  
 の春に企画された新入生歓迎セミ

ナーのプロジェクト・リーダー一  
 同を代表して「岩波理化学辞典」  
 をお祝いとして寄付された。

たいことはその文明を支えていた  
 商業がアリア人の移動によって  
 途絶してしまつたのではないかと  
 いうことであり、文化交流あるい  
 は貿易が、いかに一つの文明、社  
 会を育てるのに大きな役割をして  
 いるかということ、今から三、五  
 〇〇年も前に見ることができると  
 思うのである。このような活発な  
 商業活動があったということが、  
 それぞれの地域が非常に異なった  
 性格を持ちながら、ある共通の初  
 期古代という文明の性格をつくり

卓話の講師シュチュアート氏は、  
 大浜先生や上代たの先生とも親し  
 い友人であるし、文化セミナーの  
 延長パーティーにもふさわしいス  
 ピーカーであるという飯田専務理  
 事からの紹介をうけて立たれ、上  
 手な日本語で文化交流の仕事につ  
 いて語られた。現在は国内、国外  
 のからみ合わせの時代であるか  
 ら、国際感覚が大事であるが、そ  
 れ以上に A Spirit of Universality  
 が必要である。アメリカには人種  
 偏見、日本には島国でかつ鎖国と  
 いう経験による外国人対日本人と  
 いう競争心が残存しているから、  
 これからの若い人に期待したい。

Abrave new World の考え方に立  
 って欲しい、と述べられた。屋外  
 に用意した模擬店は、折から降り  
 だした雨にたたられて、効果を発

あげたのではないか。この繰り返  
 しが現代世界への接近をつくりあ  
 げてきたのではないだろうか。  
 このように、文化交流の基礎に  
 は政治と経済(商業、貿易)があり、  
 その基礎の上に世界を結びつけて  
 いく要素が古代からあって、現代  
 の世界はそれによって成長してき  
 たということ、文化交流という  
 問題を考えていく際の基礎にしな  
 ければならないと思うのである。

〔第42回大学共同セミナー〕  
 全体講義の概要、文責編集者

揮できなかったが、焼いも、わた  
 菓子、甘酒など野趣濃厚で若い人  
 人の味覚をそそり、談笑はつきる  
 ことなく、時を忘れて、食欲を満  
 たしたようである。かくて記念す  
 べき一ページを綴った一日を終つ  
 た。

よろこびの集いに出席して  
 日本女子大学名誉教授 大原恭子  
 祝賀のまごころに満ちあふれた  
 昨日の六周年記念会の光景が今朝  
 も私の心に何より先にパツと展開  
 しました。何から何まで百パーセ  
 ント素晴らしかったです。欲をいえ  
 ばお天気ですが、これは人力では  
 かなわぬこと、一つぐらい欠けた  
 方が人間が謙虚になって結構です  
 大浜先生の金婚式のウェディン  
 グケーキはなんととも名案で秀逸で  
 した。大浜先生のおんな無邪気な  
 面白いお話は初めて伺いました。  
 (専務理事宛書翰より抜粋)

### 第40回 大学共同セミナー

#### 主題 地域調査

期日 昭和46年7月22〜26日

この共同セミナーは別名夏季長期セミナーと称し、夏の休暇を利用した五日間のセミナーであっていつもより時間的にも余裕があり、文化人類学または考古学の宝庫ともいべき八王子周辺の実態調査を行なうことができた。理論の上に実証的研究があり、現地調査が行なわれ、主題の如く「地域調査」による地方史研究であった。

地元の若手研究者、大学の民族学者、建築学者、社会学者を交えてのセクション指導教授陣はさらにすばらしく、企画と運営の責任者一橋大学竹内啓一先生の努力の賜物である。

期間中各セクションとも周辺の調査に出かけ、国分寺、西多摩、調布、府中、多摩ニュータウン、保谷、小金井、八王子などの遺蹟資料館、民家、神社、寺院を回って、なんでもない村の歴史の中に世界史に関連したのを見出したようである。そこにはもつと開かれた歴史があったからである。

一方こうした地域調査に出かけることよって、セミナー・ハウスのある多摩丘陵地帯が、宅地造成のため大きく変貌していることに驚いたようである。昭和三二年に多摩自然動物園が開園され、や

- がて大学づくりが始まる。そして中央高速道路ができる、この時点から宅地造成が急ピッチで進展し、何の計画もなく自然は破壊されるままに放置されている。そこには現代があった。
- 益田勝実教授の指導で、一夜多摩地方の民謡(ぼんおどり)を習ったり、また屋外でサン・セツト・サバーを楽しんだりしたこと、も長期セミナーなればこそできたことであろう。運営委員長長竹内啓一先生のお世話、それだけ苦労が多かったわけである。
- (全体講義)
- 地域調査の意義の問題点  
一橋大学名誉教授 石田竜次郎氏
- (セクション演習)
- A 多摩の考古学 渡辺 忠胤氏  
多摩史研究会 梶 国男氏
- B 多摩における明治維新と自由民権運動 渡辺 奨氏  
多摩史研究会 沼 謙吉氏  
新井 勝敏氏
- C 住宅・土地問題 建設省建築経済研究室長 早川 和男氏
- D 日本民俗学の問題点 〃

### 第41回 大学共同セミナー

#### 主題 日本と中国

期日 昭和46年10月23、24日

(ゲスト講演)

私の見た中国と中国人

朝日新聞論説顧問 白石 凡氏

(全体講義)

I アジア・中国からみた日本

アジア経済研究所主任調査研究員 戴 国輝氏

II 中国がめざす新しい国造り

―日本近代化との対比―

アジア経済研究所研究員 小島麗逸氏

III 中国革命とその意義

福島大学助教授 藤村俊郎氏

(参加学生)

福島大学助教授 藤村俊郎氏

六六名(うち女子二八名)

東女大(一一)、慶大(五)、法政



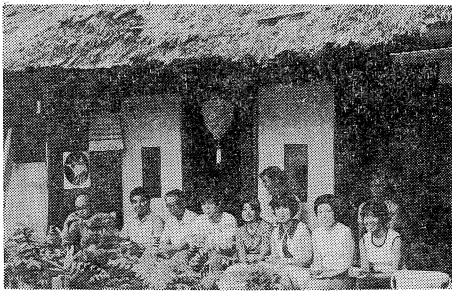
指導の先生方、左から藤村、戴、白石、飯田、沼、新井、早川、和男氏

たのである。第一回共同セミナーに企画されたアジ研の小島氏がとくにこの企画を推進され、大きな成果をあげてくださった。

ゲスト講演の白石凡氏は、十数度におよぶ中国訪問の経験から、国交回復には「誠心誠意」ということが一番大事であるということを追求しておられる厳しい日本人の姿があり、学生に深い感銘を与えた。

戴氏は日本が世界からどのような見られているかを謙虚に見直さなければならぬということ、中国人の立場から忠告されたが、先生の態度には日本が過去において犯した非をとがめることなく、真に日本の方向性に心痛されている姿が見られた。小島氏は、日本が敗戦の原因をアメリカのすぐれた科学技術にあるとしている認識に対し、中国はアヘン戦争、日清戦争を経て、科学技術は肉体は救えるが精神は救えないという認識に立ち、人間の変革を追求する動きとなつて毛沢東に継承されたことをとくに評価された。藤村氏は中国革命は世界史をどう改造しているかという問題提起をされ、ヨーロッパの資本主義、近代主義は古い中国の体制に手をかすことにより経済進出を図つた。したがって体制に反抗すると同時に帝国主義に反抗しなければならぬ、と

昨年一月、カナダが中国を承認して以来、世界の中国を見る目は急速に変化しつつある。日本は否応なしに過去において中国に犯したさまざまな関係に対し、一つの新しい判断を下さざるをえなくなるであろう。このセミナーは、われわれがこの機に臨んで、アジア、中国が日本をどう見ているか、中国革命がわれわれにとってどのような意味をもつのか、中国と日本の「近代化」の姿はどのようなものであろうか、などについて、単に一時の流行や、時流への追従ではなく、長年、中国を研究対象にしてこられた先生方の講義を基礎にじっくりと考えてみよう。こうした目的の、いわば中国セミナーというべきものとして企画され



調査先の多摩の農家で。左から三人目が石田先生

- 法政大学教授 益田 勝実氏
- E 近郊農村とその変貌  
明治大学教授 石井 素介氏  
一橋大学助教授 竹内 啓一氏
- F 文化人類学におけるフィールド・ワーク  
国際基督教大学助教授 青柳 清孝氏

- G 社会学における地域調査  
成蹊大学助教授 安原 茂氏  
(ゲスト講演)  
歴史研究における郷土史・地方史

- 明治大学教授 木村 礎氏  
地域研究について考えること  
東京大学助教授 小堀 巖氏  
(参加学生)

- 八一名(うち女子三十七名)  
早大(八)、お茶の水女大(六)、武蔵大、ICU(各五)、東教大、明大、法大、明学大(各四)、一橋大、慶大、日女大(各三)、東京学芸大、東北大、津田塾大、東女大、上智

大(各二)、東大、東外大、信州大、奈良女大、阪大、独協大、実践女大、昭和女大、東海大、神奈川大、駒沢大、中央大、共立女大、拓大、日大、亜細亜大、西南学院大、関西学院大、慈恵医大、和光大、聖路加看護大、神奈川県立外語大(各一)。(三八大学)

(主題の主旨)  
社会調査あるいは地域調査は、社会学科、人文社会学科の遺産として、社会的、人文諸事実の解明、これら諸学科の理論的達成に資してきた。同時に、諸学問分野においては、それぞれ理論的研究とそのような実証的研究、あるいは現地調査との関係、関連において実証的研究や調査のあり方、意義ということが絶えず反省され、議論されてきた。いわゆる学問の総合化、あるいはさまざまな学問分野の協力ということが、もとも問題になっていっているのも、いわゆる地域研究においてである。調査研究の主体と対象、すなわち調査する側とされる側との緊張関係や調査そのものの意義ということがいちばん問題になるのも、本来基礎的な研究作業であるべき実態調査や郷土研究、地域研究においてなのである。

今回は各専門分野の研究者の外に、在野の地方史家を含めた講師団を編成し、多摩の山野にフィールドワークを展開し、郷土・地域の研究ならびにその方法について学び考えたい。

いう徹底した反帝国主義の立場に立っていると述べ、古い体制とは地主制を根にしているが故に農民運動が中国革命の中で大きな意味をもつゆえんであることを指摘された。

### 第42回 大学共同セミナー

主題 文化交流の役割—比較文化と関連して—  
期日 昭和46年11月5〜7日

一泊二日の短かいセミナーであったが、再度のアジアセミナーの開催を希望する声が多く、われわれはアジアの中の日本の将来を真剣に考える時代が来たことを痛感するのである。

戦後の新しい日本—文化国家の建設を目指しつつ今日に至ったのであるが、果して現代の日本はどうか—を考えたおすべきではないか、いわゆる観念的に、文化があるかどうかのように妄想して、自分にひきかえ、自分の問題として文化を考えることがないのではないか。こうした立場から、後記主題の主旨に基づいて企画されたものである。

このセミナーの構想は、考古学の権威者としても著名な三上次男教授を中心として推進されたものである。一方この時期は開館六周年記念にも相当するので、最終日には、六周年記念の行事と合併し、お祝いパーティーを行ない、かつゲスト講演では外国人から見た文化について聞くことにし、ステュアート氏が招かれたわけである。

(全体講義)  
文化交流の役割  
青山学院大学教授 三上次男氏  
(セクシオン演習)

- A 文化交流  
東京大学教授 護 雅夫氏
- B 文学における交流と比較  
東京大学助教授 芳賀 徹氏
- C 文化交流の条件  
東京大学助教授 木村尚三郎氏
- D 近代日本美術における東と西  
東京大学助教授 高階秀爾氏  
(参加学生)
- 七二名(うち女子三九名)  
早大(一一)、津田塾大(八)、慶大(五)、青学大、中央大(各四)、東大、日女大、東女大(各三)、東外大、東京医歯大、宮城教育大、聖心女大、共立女大(各二)、一橋大、お茶の水女大、横浜国大、埼玉大、新潟大、神戸大、都立大、都留文科大、上智大、東洋大、麗沢大、学習院大、東海大、立大、武蔵大、国学院大、関東学院大、立正大、ICU、専修大、東女短大(各一)。  
(三四大学)

一見、相互の文化や社会状態が近づきつつあるように感じられても、実際はそれぞれの地域の伝統的文化的根底は案外ゆるがぬことが多い。東は東、西は西、政治、経済、文化の交流や融合を問題にする場合には、まずそれぞれの地域の社会や文化の基礎を知っておかなければならない。

一方、両地域あるいは両民族の交渉の過程の検討は、いきおい両者の比較にまで行きつき、その結果単独では解明できなかった両者の特質が浮き彫りの形で現われてくる。文化の比較は、人類の発達を見つめる場合でも、一つの地域や民族の性質を追求する時にも鋭い武器の一つとなる。だが比較文化の方法論を探し求めることは必ずしも容易ではない。

「文化交流」とか「文化交渉」とかいう言葉は、実はどのように相互の社会や文化に実質的な変化を与えたかという視点から出発しなければならぬ。ただこの視点をどのように具体的事実と反映させるかという点になると、現在必ずしも十分に検討されているとはいえない。

このように、一地域の歴史を知り社会や文化を浮びあがらせる上でも、あるいは世界に通じる一時代の時代的特質を考える上でも、きわめて重要な役割を演じる文化交流の諸問題や、これに関連する文化比較の問題点を考えたい。

# 大学入試改革の現状をさぐる

## ——第四回大学教員懇談会——

昭和46年9月25日、26日

この懇談会は国公私立大学教員が意見交換をする広場である。今回は大学教育のガンともいふべき入試問題を取りあげた。問題の性質上、高校側の協力が必要とするので、今回は高校側にも参加を求めた。こうした企画はこれまでになかったので、大変好評であった。

小川芳男氏は文部省の入試改善委員会の委員長をされているので、現状および展望についての問題点について有益な内容のある講演をされ、高校側は、校長として、また一般現場教師として、それぞれの立場からの発言があり、大学側からは、各大学の最近の実例をきき、国立と私立の代表的大学の傾向を知ることができた。

いづれも豊富な経験を持っておられる教員達であるし、自由で、すべての束縛から解放され、人間形成の場所でありたいと願っている高校側の発言と、素質のある学生をただ一回きりの入試で、いわば一本勝負で学生の運命を決めてしまふ現在の学力テストだけではいけないという大学側の発言の中に、ようやく共通学力テストの必要が認められつつある気運が読みとられた。そして調査書の改善とその内申書の意義についても強調され、要するに大学教育をうける

に相応しい資格を公平に総合判断できる方式を探すことである。抽選式、内申書式、全員入学式、推薦式、論術式、論文式等が紹介され討議された。東大安藤教授からはいわゆる東大方式ともいふべき論術式が紹介され、論文式では人生を論ずるという感じをうけるので論術式という方式を案出したこと、湊教授からは各科目で論術式の解釈が違ふこと、採点に大変手間のかかることなど、いくつかの問題点のべられ、いづれにしても若いときを受験勉強にあくせくさせないこと、素質ある者を落さないこと、高校教育をゆがめないこと等が白熱的に論議された。

大学改革の現状について  
いわゆる大学紛争を契機として大学改革の問題が取りあげられたのであるが、今回は広島大学と東京工大の改革の実状について詳しくお話できた。静かに、長期的な展望の中で、また特色ある大学づくりが進行しているのである。ここでは新しい総合大学の構想、学部を持たない大学院大学の構想などが意欲的に研究されているようである。いかなる経緯でこの構想を実現するか、日本においては文部省の位置づけも改革案の中に組み入れられるべきであろう。

二日間そして夜もおそくまで、熱心な討議が行なわれ、具体的な資料が豊富に続々と提供され、入試改革の現状とその背景について十分理解を深めることができた。

池田(東工大)、川瀬(ICU)、緒方(上智大)、井門(津田塾)、馬場(教育大)の諸教授の運営上のご苦労があつてこの成果をあげ得たのである。広場はこうして成長する。なお、当懇談会の記録書は一月下旬、当ハウスから刊行の予定。

〔参加者〕 七二名  
中央大(三)、東大(三)、東京医歯大(一)、明大(一)、日大(一)、法大(二)、上智大(三)、理大(二)、教育大(六)、日女大(二)、早大(一)、東外語大(三)、立大(二)、慶大(二)、東工大(七)、武工大(二)、横国大

(一)、電通大(三)、農工大(四)、ICU(二)、津田塾大(三)、東経大(三)、専修大(三)、広島大(二)、北大(一)、高校八校(九)。

〔シンポジウムB〕  
〔発題〕  
「論術式(東大方式)」  
安藤良雄氏  
同 東京大学教授 湊 秀雄氏  
「大学入試に関する追跡調査」  
東京工業大学工学部教授 小林敬美氏  
「推薦入学制」  
慶応義塾大学工学部教授 田島一郎氏  
上智大学副学長 山本襄治氏

〔参加者〕 七二名  
中央大(三)、東大(三)、東京医歯大(一)、明大(一)、日大(一)、法大(二)、上智大(三)、理大(二)、教育大(六)、日女大(二)、早大(一)、東外語大(三)、立大(二)、慶大(二)、東工大(七)、武工大(二)、横国大

〔参加者〕 七二名  
都立墨田工業高等学校長 仁藤友雄氏  
都立玉川高等学校教頭 大野慎一郎氏  
大東文化大学第一高等学校長 坂本 通氏  
城北高等学校教諭 大山 健氏  
東京工業大学長 加藤六美氏

〔参加者〕 七二名  
都立墨田工業高等学校長 仁藤友雄氏  
都立玉川高等学校教頭 大野慎一郎氏  
大東文化大学第一高等学校長 坂本 通氏  
城北高等学校教諭 大山 健氏  
東京工業大学長 加藤六美氏

### 寄付金報告

昭和46年7月11日

ご支援を感謝して、拝受いたしました。

#### 〔一般寄付者芳名〕

- 一、五〇〇円 中央大学 近藤 圭一殿
- 三、〇〇〇円 東京大学 安藤 良雄殿
- 一、〇〇〇円 学習院大学 岡本 ゼミ殿
- 一、六五〇円 成蹊大学 宇野 ゼミ殿
- 一、〇〇〇円 東体指協第六ブロック研究会殿
- 一、〇〇〇円 日野市 木村 茂殿
- 三、〇〇〇円 日本大学 瀬在 良男殿
- 〔指定寄付者芳名〕
- 〔植樹基金〕
- 五、一一八円 第四〇回大学共同セミナー殿
- 六、〇〇〇円 大学英语教育学会殿
- 五、〇〇〇円 家族社会学セミナー殿
- 一〇、〇〇〇円 全国高校家庭クラブ殿
- 三、二五三元 第四一回大学共同セミナー殿
- 三、九三四円 第四二回大学共同セミナー殿
- 五、〇〇〇円 新韓学術研究会殿
- 一、〇〇〇円 共立女子大学 手塚、大島ゼミ殿
- 三、〇〇〇円 図書購入基金
- 三、〇〇〇円 印刷技術協会殿
- 一、〇〇〇円 青山学院大学 原 ゼミ殿
- 洋傘 一〇〇本(ネーム入り)
- レコード 三枚 46年度卒業生
- 森川 和久 助 盛晴 佐久間純郎
- 三上 郁夫 三根 松子、矢部ユキ子
- 吉田 園子殿

# 千人会

千人会のご入会を感謝します

現在会員

五九三人 (大学人 四六二人  
社会人 一三一人)

第15回報告 (申込順)

B 東京工業大学名誉教授

B 東京工業大学教授 遠山 啓殿

B 東京工業大学教授 中村 正久殿

B 東京都立大学教授 大村 晴雄殿

C 白梅短期大学教授 井手 則雄殿

B 明治学院大学教授 天達 忠雄殿

C 東京都立商科短大助教授 塚本 利明殿

C 国立音楽大学講師

C 東京工業大学助教授 荒川 有史殿

C 東京都立大学助教授 末松 安晴殿

C 東京都立大学助教授 光延 明洋殿

C 東京工業大学教授 佐々木 彰殿

C 帝京大学教授 武村 次郎殿

C 早稲田大学教授 川島 順平殿

C 早稲田大学教授 堀江 忠男殿

C 青山学院大学教授 深沢 実殿

C 東京工業大学助教授 谷口 汎邦殿

B 津田塾大学教授 東 寿太郎殿

B 東洋医科大学教授 岩浅 武雄殿

C 東大宇宙航空研究所助教授

大須賀節雄殿

東京工業大学助教授 穂山 貞登殿

日本女子大学教授 岡本 栄一殿

東京大学教授 福田 敏一殿

中央大学教授 川添 利幸殿

東京工業大学教授 慶谷 淑夫殿

以上二三名

◎会員からのたより

(一) 日経新聞記者 奥 繁光

セミナー・ハウスに集まって結婚式をしてから一年あまりたち、元気な女の子が生まれました。あかね」といいます。

ヨチヨチ歩けるようになったらぜひとも野猿峠の上まで登っていき、あかね色にそまる富士を眺めたいと思います。

中央大学助教授 増田義男

誕生祝いのカードをありがたうございました。今年も健康に恵まれて、この日を迎え得たことに對する感謝をもって千人会の会費をお送りいたします。今年の四月は東京医科歯科大学の新入生オリエンテーションではお世話になりましたがとうございました。来年四月もまたよろしくお願いいたします

お茶の水女大教授 松元文子

お蔭様で大変元気に働いております。ご発展を祈っております。

明治大学教授 内田章五

本年もお蔭様で無事に誕生日を迎えることができました。感謝の印までにご送金いたしました。ご発展を祈ります。

早稲田大学教授 鶴岡義一

誕生日のためのお祝いのカードありがとうございます。

お蔭様で本年も千人会の寄付をお送りできることは嬉しいことです。

Energy」二九

エッソスタンダード石油廠

「シユワイツァーの現代的意義」

「Peace Research in Japan」

「武蔵野断唱」「北一輝論」

「現代の危機はどこにあるか」

「診療の眼」

「歴史の研究」第一六、一七巻

「キルケゴール著作集」全二一巻「キルケゴール研究」

「沢村胡夷全詩集」花輪知子殿

「アラブ近代文学の群像」

「講座アメリカ文化」別巻

「歴史と社会」

「人間の生き方」

「現代の哲学」

「農産物貿易の構造分析」

「青梅物語」

「多摩の五千年：市民の歴史発掘」

「日本人」

「わらべうたの研究」

「ファウスト」

「人間変革の論理と実験」

「細胞とガン」

「国際問題」一三一～一三六号

「岩波講座 世界歴史」第一

三、一九、二〇、二七、二八

三〇巻

「都市形成の論理と住民」

「回想記」

「社会学論叢」五〇、五一

「世界の名著」第四一、五六、五七巻

「高木八尺著作集」第五巻

「アメリカ研究振興会殿

「八王子の文化財」

「八王子市教育委員会殿

「Shakespeare's Sonnets」

「生きがいの経営学」

「日本人」

「わらべうたの研究」

「ファウスト」

「人間変革の論理と実験」

「細胞とガン」

「国際問題」一三一～一三六号

「岩波講座 世界歴史」第一

三、一九、二〇、二七、二八

三〇巻

「都市形成の論理と住民」

「回想記」

「社会学論叢」五〇、五一

「世界の名著」第四一、五六、五七巻

「高木八尺著作集」第五巻

「アメリカ研究振興会殿

「八王子の文化財」

「八王子市教育委員会殿

「Shakespeare's Sonnets」

「生きがいの経営学」

「日本人」

「わらべうたの研究」

## 寄贈図書

昭和46年3月  
～7月

「わらべうたの研究」

「ファウスト」

「人間変革の論理と実験」

「細胞とガン」

「国際問題」一三一～一三六号

「岩波講座 世界歴史」第一

三、一九、二〇、二七、二八

三〇巻

「都市形成の論理と住民」

「回想記」

「社会学論叢」五〇、五一

「世界の名著」第四一、五六、五七巻

「高木八尺著作集」第五巻

「アメリカ研究振興会殿

「八王子の文化財」

「八王子市教育委員会殿

「Shakespeare's Sonnets」

「生きがいの経営学」

「日本人」

「わらべうたの研究」

「ファウスト」

「人間変革の論理と実験」

「細胞とガン」

「国際問題」一三一～一三六号

「岩波講座 世界歴史」第一

三、一九、二〇、二七、二八

三〇巻

うに隆盛なることを祈ります。諸先生によりしくお伝えください

早稲田大学教授 鶴岡義一

誕生日のためのお祝いのカード

ありがとうございます。

お蔭様で本年も千人会の寄付をお送りできることは嬉しいことです。

「Energy」二九

エッソスタンダード石油廠

「シユワイツァーの現代的意義」

「Peace Research in Japan」

「武蔵野断唱」「北一輝論」

「現代の危機はどこにあるか」

「診療の眼」

「歴史の研究」第一六、一七巻

「キルケゴール著作集」全二一巻「キルケゴール研究」

「沢村胡夷全詩集」花輪知子殿

「アラブ近代文学の群像」

「講座アメリカ文化」別巻

「歴史と社会」

「人間の生き方」

「現代の哲学」

「農産物貿易の構造分析」

「青梅物語」

「多摩の五千年：市民の歴史発掘」

「日本人」

「わらべうたの研究」

「ファウスト」

「人間変革の論理と実験」

「細胞とガン」

「国際問題」一三一～一三六号

「岩波講座 世界歴史」第一

三、一九、二〇、二七、二八

三〇巻

「都市形成の論理と住民」

「回想記」

「社会学論叢」五〇、五一

「世界の名著」第四一、五六、五七巻

「高木八尺著作集」第五巻

遠藤浩一殿

増田四郎殿

谷川徹三殿

柏原啓一殿

芳野良男殿

遠藤浩一殿

ふえみみなあ社殿

渡辺忠胤殿

桐 国男殿

# 大学合同セミナーを 開催して



慶応大学専任講師

渡辺 彰

いくつかの大学の同じ専攻テーマをもつ学生と教員が合同してセミナーを開くことはかねてからの私の念願でありました。以前に欧米諸国で若干の大学を訪問した折に、多くの大学の間に教育・研究の両面で密接な協力体制があることを見聞き羨ましく思いました。国内のある教育研究会の席上で他大学の先生方と大学間の相互協力は、ぜひ必要と考えられるが、どのようにしたら実現できるかを議論したこともありま。しかし、実行の段階になると種々の障害が存在することが判りました。そこで大きな理想を追うよりも、身近な所で着実に実行できることを探し求めて思いついたのがこの大学合同セミナーでありました。さっそく、学会で同じ研究グループに属する先生方にこのことをお話ししたところ賛同がえられました。まず試みとして一昨年の秋に大学セミナー・ハウスで私の研究室の卒研生三名に東京農工大学電気工学科村崎憲雄先生の研究室の学生一名を加えたセミナーを行いました。

昨年はいさらには愛知工業大学の先生方と学生を迎え、三大学から教

員六名、学生一四名が集まり「電気卒研合同セミナー」を四日間開催しました。われわれの目的は「なれあい」を排除し刺激を与え、静電気学は最近急速に発展し境界領域に達しているのだから、卒論の中間発表の形式をとることも、卒論の中間発表の形式をとることも、大学間の交流を密にすることなどでありました。今年は一二月一日から三日までの会期で名古屋大学、日本大学、理化学研究所からの参加者に加え教員五名、学生二〇名が参加して行なわれました(他に七名参加予定者あるもストライキのため欠席)。今回は六つのセッションを設け、冒頭に教員が一時間講義をした後に関連テーマをもつ学生が二五分発表を行ない、一五分討論する形式をとりました。

質問は活発でしばしば打ち切らざるを得ませんでした。朝九時から夜一〇時半頃まで、休憩も入浴も返上して勉強を続けました。深夜、学生の宿舎を訪問したところ、彼らが熱心に読書している姿を見て大変感動いたしました。結局このセミナーでは「和の効果でなく積の効果」が得られたと確信しております。

また大学セミナー・ハウスはこのような会合にはもつとも適した施設であることを痛感した次第であります。

## 大学交流の 芽を拾う

合同ゼミナールよ  
育て!

ミナール、それも卒業の研究論文の発表を主としたものである。愛知工大も参加の予定だったが、しいが今回は二三名の参加者であった。大いに成果をあげて帰られたとのことである。

### III 宇野合同ゼミナール

上智・成蹊両大学

これは、もう一つの品種である。かつて東大文学部山本達郎教授が四大学の学生をつれてきてよくやっていたのであったが、最近あまりきくことがなかったが、これこそもつとも好ましい方法である。どうせ多くの先生方が、二、三の大学の講師を兼任されていることでもあるから、年に二度位はこうした合同ゼミもぜひ試みてもらいたいものである。

それは成蹊大学の宇野重昭教授が上智大学外国語学部の講師を兼ねておられるので、同教授の国際関係論のゼミナールを合同して行なったわけである。一月二二、二二、二三日の三日間二二名の学生によって、大学を超えた宇野ゼミナールが行なわれた。歓迎すべきゼミである。

### IV 立教大学野田ゼミナール

これは、前二者と異なったもう一つの品種である。同学の中で同じ専攻の学生が一年から四年まで参加して行なわれるものである。上級、下級の別なく、一つのゼミナールに参加して、同じ教授の指導をうけるのである。社会学部観

光学科の野内一夫教授のゼミで二月一五、一六日に二八名が参加して行なわれた。東京女子大学の白井常教授なども以前はよくやっておられたようである。少くとも、二、三年合同のゼミナールはできそうである。奨励したい品種の一つである。

なお一月二二、二三日には津田塾大の小野山卓爾教授の指導で、一橋、東大、津田の三大学合同の「解析概論研究」のセミナーが、男女一二名の参加で行なわれる模様である。

### 予告

#### 大学共同セミナー

##### ▼第45回

主題 家を考える

期日 昭和47年2月12・13日

(全体講義)

東京大学教授 吉武 泰水

早稲田大学教授 吉阪 隆正

(セクション指導)

石毛直道、広田寿子、村武

精一、荻原正三。

##### ▼第46回

主題 自然界における対称性

期日 昭和47年3月10・12日

(全体講義)

東京教育大学長 宮島 龍典

国際学生セミナー

主題 アジアの平和と開発

史的社会的性格

(参加者)

日本人学生二〇名 在日アジア留学生四〇名



# 業務通信



## 夏から秋の研修像を拾う

新しい世界への希望と期待を秘めた新入生達のオリエンテーションが、四、五、六月とキャンパスを彩りつた後、七、八月の夏休みは、ここセミナー・ハウスのピーク時であり、またかき入れ時でもある。

夏休み中の利用の特徴は、そのバラエティーの豊富さであり、当ハウスが全国的、国際的広がりを持つのもこの時期である。ハワイ大学の先生を招いての英語教育者の長期研究会、日米学生会議、国際経済商学学生協会、全国から女子高校生が集まる家庭クラブ連盟、上智大と関西学院大を中心としたブラジル語の研修会などである。

この丘の上に秋が訪れると、日独地理学会をはじめ、若手研究者の集會等学会の利用が多くなる。小児神経学会や金属学会などは、企業や大学以外の研究者も数多く参加されるので、現場の息吹が感じられた。

秋は収穫期でもあれば、卒業論文のまとめに個人利用の学生達がやってくる。一月のある日、偶然に学士、修士、博士の論文に取

り組んでいる三人が一緒にになり、食卓を共にするなど、セミナー・ハウスならではの交歓の機会をつくっていた。ちなみに論文のテーマは、それぞれ、平家物語、発展途上国の教育、品質管理ということであった。この丘にくると一人が一人でなくなるのである。

◇頭の痛いのは、予約の取消が多いことです。また申込時より実際の利用人員の減少が目立って多いために、今年の下半期は例年比べ利用率が低くなりそうです。とくに二月は目下のところ、大変淋しい春先のようなようです。どうか学生の皆様が、効率あるゼミナールをなさるため、この丘を訪れてくださるのを業務課員一同鶴首しながらお待ちしております。

### ◆ 共立女子大学文学部 ゼミ便り

風の幹に霜をおく季節になりました。皆様、お元気で過ごさることを存じます。私たちが、以後元気を毎日を送っております。先日は、親切なお心遣いを戴き、ありがとうございました。すばらしい部屋、熱いコーヒー、親切な皆様……。一同、満ち足りた気持ちで、八王子の丘を降りることができました。先生を前にして、自分の意見を述べづらく、何となくうちとけなかった教養ゼミの雰囲気がいずいぶん、なごやかになり、いづらか、自分の言葉で話せるよう

になった気がします。私たちは、この雰囲気、学内でも維持し、教養ゼミをより、有意義なものにしていきます。お世話になり、本当に、ありがとうございます。なお、同封いたしましたのは、総会計の際の残金です。なんらかのお役に立てば、一同うれしく思います。寒さに向かいます折、皆様お元気で過ごしてください。

十一月二二日  
手塚、大島ゼミ一同

### 昭和46年度上半期利用状況

利用者別ゼミ回数・宿泊人員 ( )内は実人数

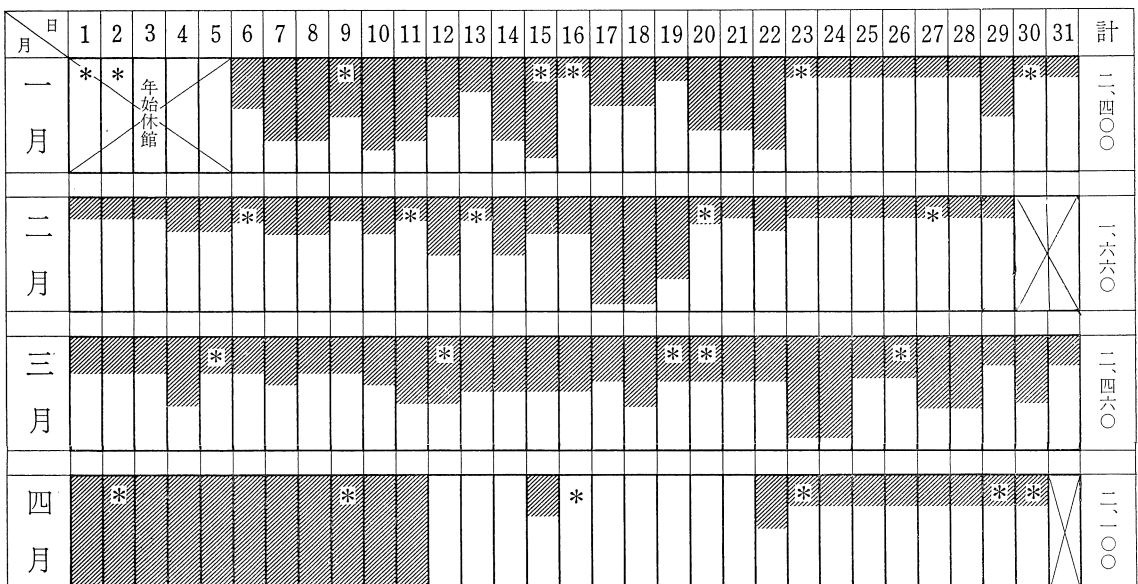
区分	ゼミ回数(率)		宿泊人員(率)		1団体平均人数	平均宿泊日数
	回数	率	人数	率		
会員校	237回	58%	8,481人	39%	25.7人 (6,134)	1.5日
非会員校	66	16	4,817	22	40.5 (2,673)	1.4
大学連合	10	3	2,707	12	73.5 (735)	3.6
学会・教育団体	23	6	1,873	8	31.6 (728)	2.0
個人	70	17	3,811	18	26.5 (1,857)	1.9
計	406		21,758	1	29.9 (12,169)	1.7

### 月別宿泊延人員

区分	延人数	定員比
4月	3,427人	50.8%
5	4,312	57.9
6	2,470	39.5
7	4,249	57.0
8	4,397	58.7
9	2,834	45.4
計	21,689	52.5

### 昭和47年1月～4月予約状況

46・12・25現在



(注) \* ……日・祝祭日    ……予約済    ……申込受付中

# 利用状況



……七月

- 国際基督教大学講師 岡野 昌雄
- 国土館大学助教 亀山 潔
- 法政大学友会技術連盟(グループ・リーダーズ・キャンプ)
- お茶の水女子大学新入生セミナー
- 東洋大学教授 泉 治典
- 東京都立大学助教 速水佑次郎
- 上智大学教授 佐多 真徳
- 東京大学教授 内田 久雄
- 法政大学司法講座 高山征治郎
- 一橋大学助手 高橋 三雄
- 都立商科短大助教 成田 修身
- 東京大学教授 内田 久雄
- 中央大学教授 三橋 文明
- 京王帝都電鉄(課長研修)
- 東洋大学教授 飯島 宗享
- 日本大学講師 黒沢 一清
- 上智大学助教 山口 精二
- 上智大学助教 中野 記偉
- 法政大学司法講座 霜島 甲一
- 明治学院東村山高枝
- 立教大学助教 大橋 泰二
- 慶応義塾大学教授 榎田 仁
- 東京大学助教 浜井 修

- 東京大学助教 杉山 好
- 東京大学教授 安藤 良雄
- 慶応義塾大学教授 中鉢 正美
- 中央大学教授 近藤 圭一
- 東京都立大学司法研究会
- 国際基督教大学助教 原 一雄
- 電気通信大学短期大学部(一年次合宿セミナー)
- 和光大学教授 山崎 昌甫
- 一橋大学宮川ゼミ 吉川 智教
- 婦人友社編集部
- 東京都立大学教授 半谷 高久
- 独協大学教授 林 俊一
- 日白学園女子短期大学助教 中山 昌
- 明治学院大学教授 神保 信一
- 東京大学教授 関口 忠
- 東京大学教授 高橋 秀俊
- 国立音楽大学イタリア語同好会 片山 暁子
- 韓日キリスト者友和セミナー 高橋 三郎
- 都立商科短大教授 島袋 嘉昌
- 学習院大学教授 児玉 久雄
- 経堂北教会青年会 四竜 揚
- 東京都立大学教授 佐藤 英男
- 明治学院大学講師 柳沢 治
- 東京音楽大学教授 南 弘明
- 道徳科学研究所 宮沢 雄治
- 東京理科大学助教 宮沢 雄治
- 田村電機製作所 武沢 信一
- 立教大学教授 M・クレスポ
- 東京外国語大学教授 M・クレスポ
- 明治大学駿台祭実行委員会 宇野 重昭
- 成蹊大学教授 佐藤 信行
- 七葉会自主セミナー 佐藤 信行
- 大学英语教育学会第五回夏期セミナー
- 第四〇回大学共同セミナー
- 鶴見女子大学助教 井村 君江
- 早稲田大学実存主義の会 掛下栄一郎
- 明治大学教授 大久間喜一郎
- 早稲田大学教授 栗山 昭一
- 東芝商事首都圏支店(管理者研修)
- 武蔵工業大学教授 中岡 二郎
- 東京工業大学ホログラフイノワティブ研究会 長崎 巍
- 松原教会夏季修養会
- 立川スプリング(社内研修)
- 慶応義塾大学講師 西野 寿一
- 早稲田大学生産研究所 文化シャッター(社内研修)
- 東京大学教授 高井 康雄
- 武蔵工業大学教授 岡本 定次
- 中央大学教授 野沢 豊
- 日本大学教授 武藤俊之助
- 明治学院大学教授 天達 忠雄
- 東洋大学講師 早川 和男
- 海運研究会(読書会)
- 日本大学教授 染野 義信
- ……八月
- 東京都立大学助教 針生 誠吉
- Hノマル給食会研修会
- 国立教会 中島 省吾
- 日本オイルシール工業講習会
- 浅香電業社研修会
- 川鉄商事課長セミナー
- 第二三回日米学生会議
- 日本大学商学部弁論部
- 順天堂大学重障児問題研究班
- 文学教育研究者集団 熊谷 孝
- 東京都立大学助教 稲垣 寛

- 国際経済商学学生協会 宮川 亮一
- 富士電機東京工場(課長研修)
- 中渋谷教会修養会
- 日本女子大学教授 一番ヶ瀬康子
- 都立商科短期大学二部自治会
- 法政大学教授 霜島 甲一
- 上智大学教授 川本 茂雄
- 東京外国語大学現代アメリカ文学を讀む会
- 産業関係研究協会 田中 義久
- 日野協力会
- 武蔵大学講師
- 伯東化学(社員研修)
- 杏林薬品社内研修会
- 京王帝都電鉄(部課長研修)
- 語学教育振興会ITC 松崎 健
- 東京スクールオブビジネス 垂水会(古代文学研究)
- 工学院大学ESS
- 日本印刷技術協会経営者セミナー
- 東洋大学教授 飯島 宗享
- 立教大学教授 岩井 祐彦
- 慶応義塾大学講師 三戸 慶一
- 日本学生英字新聞連盟
- 東京大学NTD研究会

寄付金に寄せて

小林 恭子

学生時代、二度ほどセミナー・ハウスでお世話になったのですが、その経験は私にとってとても貴重な忘れ難いものとなりました。

今春大学を卒業して、そのまますぐ副手として研究室で働いておりましたが、私の大学も会員校でセミナーの案内が掲示される度に当時の感激が胸に湧きあがってまいります。副手とはいえ、室内の雑事に追われ、ろくな勉強もしないままもはや夏休みを迎えようとしておりますが、セミナーで味わい知ることのできた、学ぶこと、求めることの素晴らしさ、そしてその必要性を忘

れることなく、将来にわたって勉強し続けなければならぬと、いいかせる日々です。

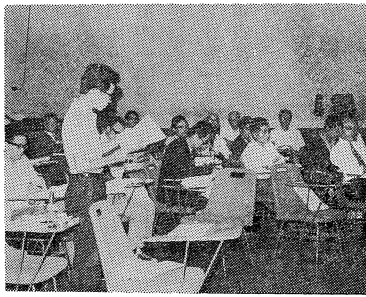
なお時には実際の共同セミナーにもできる限り参加させていただきたいと思っております。

飯田先生はじめ、皆様どうぞ暑さに負けず後進のもののためご活躍くださいませようお願いたします。

同封いたしましたお金は、私の初ボーナスの一部で、ほんの少々ですが設備費の一端にでもお使いいただけたと存じます。皆さまお体には十分お気を付けてお過ごしくださいませ。緑濃い八王子の丘に再び登ることができる日を待っております。

飯田先生

(共立女子大卒)



熱心な討論…明治大学教職員研修会

- 東京都立大学教授 秀村 欣二  
 明治学院大学教授 佐藤 隆夫  
 専修大学教授 森藤 一男  
 東京女子短期大学講師 梅井 義雄  
 東京学芸大学助教授 岡田 純枝  
 光印刷東京事業部(係長研修) 永野 賢  
 東京大学助教授 見田 宗介  
 東京経済大学助教授 長谷 政弘  
 法政大学教授 田沼 肇  
 成蹊大学教授 広野 良吉  
 拓殖大学講師 毛馬内勇士  
 高分子若手懇談会夏期セミナー 平山 輝男  
 早稲田大学学生産研究所 宇井 芳雄  
 東京学芸大学教授 東 洋  
 東京大学助教授 四宮 満  
 独協大学教授 石川 淳志  
 法政大学教授 掛川トミ子  
 津田塾大学講師 箸方 幹逸  
 東京経済大学助教授 向井 武文  
 ……九月
- 東京都立大学教授 山本三三三  
 白百合女子大学放送研究会  
 炭素材料研究会夏季セミナー  
 東京経済大学助教授 橋口 英俊  
 多摩中央信用金庫  
 東京経済大学助教授 大谷 喜明  
 白梅学園短期大学(卒論指導)  
 明治学院大学教授 天達 忠雄  
 一橋大学小平分校新入生学外ゼミ  
 ナール 渡辺 金一  
 日本女子大学助教授 古沢 頼雄  
 慶応義塾大学経営経済学研究会  
 慶応義塾大学講師 小原 格  
 明星大学講師 小池 基三  
 慶応義塾大学助教授 高山 龍三  
 東京工業大学助手 高田 宏三  
 明治大学教務関係職員合同研究会  
 一橋大学助教授 深沢 修  
 東京女子大学教授 古屋野正伍  
 東京経済大学教授 依久 良馨  
 日野自動車販売(中堅社員研修)  
 青山学院大学教授 鶴沢 昌和  
 日本電信電話公社武蔵野電気通信  
 研究所 戸川 尚  
 玉川大学教授 池井 優  
 慶応義塾大学助教授 栗原 彬  
 立教大学助教授 中村 正則  
 東京女子大学助教授 小泉 明  
 一橋大学教授 彦田 一太  
 玉川大学助教授 内海庫一郎  
 武蔵大学教授 古畑 和孝  
 日本印刷技術協会 深沢 実  
 国際基督教大学助教授 岡本 康雄  
 早稲田大学講師 渡辺 信夫  
 東京大学助教授 小林 公  
 立教大学講師 小林 公
- 青山学院大学教授 神山 妙子  
 早稲田大学観光学会 竹中 肇  
 東京大学助教授 新契約パブテスト教会  
 芝浦工業大学教職員組合  
 横浜市立大学教授 越智 昇  
 日産自動車宝会 三宅 康友  
 日本大学教授 川鉄商事(課長研修)  
 桑沢デザイン研究所教授 嶋田 厚  
 システム設計研究会 吉谷 龍一  
 住友商事職務分析セミナー  
 東京急行電鉄(中堅社員研修)  
 富士電機(社内研修) 川鍋 正敏  
 立教大学教授 順天堂大学付属順天堂医院  
 早稲田大学講師 水野 重光  
 青山学院大学教授 北野 弘久  
 成蹊大学教授 原 豊  
 東京基督教友会 宇野 重昭  
 キャンビー・ジョーンズ  
 中央大学通信教育部法学ゼミ 山本 祐策  
 東京都立職業訓練校 若林 貞雄  
 第四回大学教員懇談会  
 日産自動車村山工場(読書会)  
 専修大学教授 大島 太郎  
 中央大学教授 川添 利章  
 東京大学教授 松尾 浩也  
 第二回日独地理学研究会  
 コンピュータ・アプリケーション  
 東京大学助教授 鳥居 修晃  
 富士写真フイルム(技術系新入社  
 員研修) 小島 俊明
- 成蹊大学教授 武田 昌輔  
 都立商科短期大学教授 竹中 尚文  
 慶応義塾大学講師 伏見多美雄  
 明治学院大学助教授 久世 了  
 明治学院大学教授 横田地 弘  
 慶応義塾大学講師 中村善太郎  
 ……十月  
 明治学院大学教授 高橋 勇悦  
 明治学院大学教授 羽田 新  
 日本女子大学助教授 古沢 頼雄  
 明治学院大学教授 磯部 浩一  
 東京都立大学助教授 千葉 正士  
 東京都立商科短大オリエンテーシ  
 ョン 北條 恒一  
 東京大学キリスト教社会思想研究  
 会 西村 秀夫  
 拓殖大学ドイツ研究会  
 極東福音クルセード  
 ロランド・フリーゼン  
 東京学芸大学教授 野尻 与市  
 武蔵大学教授 中村 瑞穂  
 東洋大学助教授 神里 公  
 日野自動車販売(中堅社員研修)  
 神戸製鋼所軽合金伸銅事業部  
 京王帝都電鉄(部長研修)  
 三菱電機東京機器事業所  
 和光大学助教授 藤木三千人  
 白百合女子大学教授 後藤 基巳  
 東京学芸大学美術教育研究部  
 日本科学技術連盟シンポジウム  
 慶応義塾大学講師 野呂 影勇  
 東京家政学院大学教授 小島 俊明  
 一橋大学助手 村井 敏邦  
 東京工業大学助教授 蘆山 貞登  
 お茶の水女子大学助教授
- 酒本 雅之  
 ホットアトム化学研究グループ 松浦 二郎  
 日本女子大学助教授 倉野 精三  
 東京都立大学助教授 松浪 有  
 電気学会絶縁材料若手グループ 高田 達雄  
 日本木材学会レオロジー研究会  
 東京都立大学助教授 高島 藤順  
 大塩 俊介  
 加藤 長雄  
 柏木 恵子  
 三宅 義夫  
 武田 良三  
 アスター株式会社(社員研修)  
 東京学芸大学助教授 飯田 秀一  
 慶応義塾大学助教授 生田 正輝  
 慶応義塾大学講師 師岡 孝次  
 新都市会議シンポジウム 武 基雄  
 早稲田大学放送研究会  
 東京大学教育研究会 民労立川スプリング支部  
 日本女子大学教授 杉溪 一言  
 早稲田大学教授 松田 正一  
 東京山手YMCA 杉原 正孝  
 日軽アルミ(管理者研修)  
 北村バルブ商事 森泉 章  
 早稲田大学講師 泉 三義  
 武蔵大学社会学科有志合同研究  
 慶応大学講師 野呂 影勇  
 早稲田大学「中国を見つめる会」  
 青山学院大学講師 岡本 栄一  
 慶応義塾大学助教授 池井 優  
 日本水産(技術講習会)

慶応義塾大学講師 成蹊大学教授 法政大学教授 日本リクルートセンター 第四一回大学共同セミナー 東京都立大学教授 日本女子大学「駒場子供会」 東京都補装具研究所(身障者問題対策)	中村善太郎 三沢 一 佐藤 毅 塩崎 進 進 進	東京工業大学教授 成蹊大学カトリック研究会 京王ストア郁村会 柏木教会青年会 東洋大学教授 早稲田大学碧福会 慶応義塾大学助教授 立教大学助教授 東京工業大学教授 慶応義塾大学教授 第四二回大学共同セミナー 東京理科大学助教授 法政大学教授 駒沢大学助教授 早稲田大学ESA 日本女子大学教授 慶応義塾大学助教授 電気通信大学教授 Y.M.C.A.・Y.W.C.A.レクリエーション研究所 日軽アルミ(管理者研修会) 中央大学教授 流通技術懇話会 明治学院大学助教授 共立女子大学教授 慶応義塾大学教授 明治大学法学会 I.S.E.秋季大会 東京都立大学助教授 東京都立大学助教授 明治学院大学助教授 東京学芸大学助教授 白百合学園高等学校(修養会) 近畿日本ツーリスト中央研修所 東京神学大学学生会(全学修養会)	内藤 正 朝倉 孝吉 M・バーグ 川原 栄峰 深海 博明 木下 毅 松田 武彦 内山 正熊 関根 達也 石川 淳志 由井 正臣 岡本 栄一 山岸 健 大須賀政夫 ヨシ研究所 加藤 正泰 増田 茂樹 手塚 富雄 石井 良博 立石 龍彦 矢代 和夫 高田 衛 赤川 裕 中村 直之 佐藤 敏夫	日本聖書協会(聖書翻訳研究会) 日本大学教授 東京都立大学教授 慶応義塾大学講師 東京都立大学教授 東京経済大学教授 立教大学教授 日本女子経済短期大学教授 日本大学助教授 法政大学講師 明治大学文学部合同ゼミナール 東京工業大学教授 第四〇回共同セミナーCセクション 浦野学園すみれ幼稚園(保育研修) 明治学院大学教授 法政大学講師 東京都立大学教授 立大・早大合同ゼミ 東京経済大学講師 日本金属学会 京王帝都電鉄 武蔵工業大学教授 日本大学教授 明治学院大学教授 青山学院高等部(キリスト教修養会) 共立女子短期大学部講師 東京学芸大学助教授 日本女子大学教授 法政大学講師 早稲田大学講師 純心女子短期大学講師 グロームス 中根甚一郎 吉田 裕 横山 宏 吳 主恵 大谷楨之介	瀬在 良男 谷 重雄 西野 寿一 大羽 滋 富塚文太郎 武沢 信一 原 純子 笠井 芳夫 関野 昭一 進藤 益男 早川 和男 重田 信一 良知 力 唄 孝一 三戸 公 田村 紀之 須藤 一 堺 孝夫 栃原 敏房 倉地 幹三 内田市五郎 小川 仁 五味淵正詞 中根甚一郎 吉田 裕 横山 宏 吳 主恵 大谷楨之介
--	---	--	--	--	--

事務理事ノート

年頭のご挨拶を申しあげます。元日はあいにくの曇り空で、ご来光を拝することはできなかったが、私の年中行事の事初め、松下館屋上で真理の鐘を鳴らし、ただ一人、朝拝を行なった。静かな新春の黎明の中の黙禱である。約一時間構内を散策し、あの記念樹、この記念樹が大きくなったことにより開館七周年の歴史を考えさせられた。周辺の丘が開発されるいまとなるとは、このセミナーの丘は貴重である。

一月一日から読売新聞都下版に連載されている「若者たち」の題字をたのまれて書いたりしたので私の年末年始は国の予算シーズンとも重なって多忙を極めた。文部省の皆さんが文字通りセミナー・ハウスを支持してくれたので、どうやら国の補助金運営費が来年度からついたのである。

二七日、予算の進行状況を確めるため年末の挨拶を兼ねて文部省を訪問する。夜は八王子に帰って職員達と年忘れのスキヤキ会をする。

二八日、国際文化会館で共同セミナー「家」の準備会を東大建築科吉武泰水教授達とする。好調。

二九日、フルブライト委員会に朱牟田夏雄先生を訪ね、一月末に計画している「大学における外国語教育」の教員懇談会の主題講演をお願いする。大浜理事長宅を訪ね、予算運動の相談をする。大浜岬や沖繩のことなど話す。

三〇日、上代たの先生を訪ね、歳末放談に楽しい時を過ごす。この先生との対話に心のやすらぎを覚える。感謝すべきことである。夜は年賀状の残りを書き終る。

三一日、教員懇談会で発題者となっていただけそうな先生方に二三通の依頼状を書き速達で発送。夜は茅誠司先生と天城前文部次官に年末の挨拶と予算をたのむ電話をする。

四日、三井銀行の新年会で恩人佐藤喜一郎氏にお礼をこめて挨拶をする。文部省に廻り村山次官を初め皆さんに挨拶。廊下で森戸辰男先生にお目にかかり予算のことで激励をうける。

七日、やっとゴヤ展を見る。第一次予算内示ゼロ。銀座で石坂泰三個展を見る。文部省を拠点にして、議員会館、大蔵省、茅事務所などを歴訪し、最後の運動を展開する。

夕刻もおそく最後の奮闘を約して文部省の裏口を出る。

九日、午前中に坂田前文部大臣秘書氏より五〇〇万の予算がつかれたこと電話をうける。この第一報に欣喜雀躍する。これで学生の宿泊料や会員校の会費の値上げをしないで済むのである。教師と学生のためによき奉仕をして本来の使命を果たしたいものである。それこそが国の補助金の意味であると思うからである。